城山小学校　第８６６回　平和祈念式　令和５年１０月１０日

【少年平和像】

今朝も多くの皆さんが、少年平和像の前で拝礼する姿を見ました。登校したとき、帰るときなど、少年平和像の前を通るたびに、みなさんはしっかり拝礼をしています。拝礼をすることで、心が清らかになり、みなさんが平和の心をもつことができるのではないかと思っています。

少年平和像が城山小に建てられたのは、今からちょうど72年前のことです。長崎に原子爆弾が落とされてから、６年後のことでした。城山小学校の子どもたちのほとんどが、原子爆弾で亡くなりました。生き残った２０数人の子どもたちも、家族や住む家をなくしてしまいました。もちろん、城山小学校の校舎も壊れていましたので、生き残った子どもたちは稲佐小学校で勉強を始めました。雨や雪が降りこむ中での勉強でしたが、子どもたちは休まず学校にやってきました。家族も家もなくした子どもたちにとって、学校で勉強ができることは、とても嬉しいことだったのです。そして原爆が落とされてから３年後、ようやく城山小学校に帰ることができました。

そのころ生き残った城山の町の人たちの中から、こんな話が出てきました。「原爆でなくなった先生や子どもたちのみたまを慰めるために、そしてまた、二度と原爆のようなおそろしいものが使われないことをお祈りするために、“平和の児童祈念像”をたてよう。」というのです。その話はどんどん進み、あちこちからそのためのお金が集まりました。そして、７２年前の８月８日、少年平和像が完成したのです。

みなさんは、少年平和像をじっくり見たことがありますか？この像の少年は、原爆でお父さん・お母さんを亡くした、小学校５年生の男の子です。住む家も着るものもなく、亡くなったお父さんのズボンを焼け跡から見つけ出して、すそをまくり上げてはいています。ベルトもないので、わら縄でしめ、くつもないので裸足で立っています。この少年は、原爆で生き残り、稲佐小学校の教室を借りて勉強していた頃の、城山小学校の子どもなのです。そして、その少年の左腕には平和を願うハト。足下には、原爆で亡くなった方の魂が安らかでありますようにと祈るハトがいます。　お父さんお母さんを亡くし、本当なら寂しくて心細いに違いないのに、この少年は「お父さん、お母さん、僕はさびしがらずに、元気で人類の幸福のため、世界平和を叫び続けます。」と言っていると言われています。

また、台座に書かれている「平和」という文字は、１年生の時に原爆にあい、奇跡的に生き残った菅原耐子さんが書きました。耐子さんは、おじいさんおばあさん・お母さん・２人のお姉さん・弟・妹の７人の家族を原爆で亡くしました。亡くなった家族をまつっている仏壇の前に座り、何度も何度も繰り返し「平和」の文字を練習し、願いをこめて書いたものです。少年平和像には、「世界平和をさけび続けます」と誓った少年や、何百回も「平和」の文字を書き続けた耐子さん、そして、亡くなったたくさんの子どもたちの平和を願う強い思いがこめられています。　その思いを、城山小学校のみんなで、未来へ引き継いでいきましょう。